

最後の国立劇場にかける青春



題字 井口 文章
再刊 第433号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2023

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：日本芸能部門・郷土芸能部門の優秀校4校を紹介！
二面：演劇部門の優秀校を紹介
三刀屋高校に密着するNHKの方に取材

第34回総文祭優秀校公演2日目開催

総文祭優秀校東京公演2日目は鹿児島高校のオープニング公演から始まり、日本芸能部門・郷土芸能部門からそれぞれ2校ずつと演劇部門から3校が出演した。各校の舞台に懸ける思いなどを紹介する。

2日目オープニング 鹿児島高校和太鼓部

2日目のオープニング公演



ばちを大きく振りかぶり会場に力強い音を轟かす鹿児島高校和太鼓部

では、東京都高等学校文化連盟からの各部門の紹介が行われた後、鹿児島県立鹿児島高等学校和太鼓部の和太鼓「靖風」が披露された。

和太鼓ならではの胸に響く力強い音から入り、自然の静けさを表現した音色に移り変わる。鹿児島県の方言を交えた生徒たちの合唱へと続いていき、クライマックスには舞のような一糸乱れぬ振り付けを見せ、観客を圧倒させた。

この作品は3年生が作り上げたもので曲の構成について佐藤優斗さん(3年)は「ずっとカッコいい曲だと思ってるので音を抑えたり、合唱を入れたりして曲に抑揚をつけました」と語る。

舞台上に立つ喜びを後輩に

舞台上に立つ喜びを「鹿児島県の代表として全国の舞台上に立つことが名誉で、とてもうれいでした」と佐藤さん。これまでの道のりを振り返り、みんなでの喜びを共有したいとも話した。

佐藤さんは「人数が多いので腰の上げ下げの瞬間を一つ一つ揃える事が難しかったので練習を繰り返すという作業をするそう。

「全国レベル学べて楽しい」裏方生徒特集！#4

公演を支える高校生係のうちに、舞台係の取材に応じてく搬入・搬出したり、場ミりをした良幸さん(1年)。舞台係を担当することになった経緯を、「演劇部で部長を務めていて、顧問の先生がここで活動をしたいという話だったので、お手伝いをさせてください」と話してくれた。舞台係は裏方の役割で、主



演劇は『総合芸術』です

舞台上に張ったりするという作業をするそう。「演劇は『総合芸術』です」と語る良幸さん。この公演で行われている演劇部門以外の日本音楽部門、郷土音楽部門も勉強になると話し「話の内容や演出、照明などについて全国トップレベルのことを学ぶことができるのでとても楽しいです」と語ってくれた。

日本芸能 千葉県成田国際高校 「この公演に立つことは目標でした」



ばらばらだったパートが統一されていく姿に盛大な拍手が送られた

成田国際高等学校 箏曲部による「箏のための『展』」。会場の緊張感と期待感が高まる中始まった演奏は、強弱がはっきりとしており、かすかな音から体を震わすほどの大きな音まで、一寸の

乱れなく統一された演出に観客は聞き入っていた。最後はばらばらだったパートが同じ旋律を弾き、一致した動きで弾ききった。演奏終了後は緞帳が閉まってもなお盛大な拍手が送られた。

演奏終了後、部長の伊藤嶺さん(3年)は舞台上に立つ感想を「今までこの公演に立つことは憧れであり、目標でした。その舞台に強豪校が多かった中、お客様に音色を届けることができ本当にうれいでした」と話してくれた。また、この公演までに心がけてきたことは「去年の8月ごろからこの曲の練習をはじめましたが、3か月後の県大会でも焦ることなく基本の形から初心に戻ってやり直す、ということをしてきました」と伊藤さん。さらに、演奏中の統一した動きや強弱を完璧にするためにも、5パートからできているというこの曲を全体で合わせるために独自に研究したのだと教えてくれた。これから部活を引っ張っていく後輩たちに「ここまで一緒に頑張ってくれてとてもうれしかったです。この公演に出て、プレッシャーを抱えているかもしれないけれど、自分たちだけの音を追求して、頑張ってください」と話してくれた。

日本芸能 愛知県東海南高校 「国立劇場という場の重みを感じました」



二つの楽器の対比と融合を表現

愛知県立東海南高校邦楽部が演奏したのは「二つの群のために」。この曲は沢井忠生によって作曲されたもので、箏と十七絃のそれぞれのソリストを中心に、箏群と十七絃群の二つの群による対比と交差及び融合を表現した作品だ。演奏は十七絃から始まり、一度大きな盛り上がりを見せたかと思うと、ひよっとすると聞き取ることも難しいかもしれないほどの小さな音を出すなどはっきりとした強弱を見せた。

森田悠生さん(3年)は舞台上に立つ感想を「国立劇場という場の重みを感じました」と語る。また、舞台が「周り舞台」と呼ばれる床が回転できる作りになっており、それを見るのが初めてだったためとてもわくわくしたそう。国立劇場までの舞台で最も緊張したものは愛知県大会だそうここで負けてしまうと全国にも行けず、国立劇場の舞台にも立つことができなくなると、とても緊張したという。そして後輩へ向けて「部活動の休憩やみんなでご飯を食べるような些細な時間がとても楽しく、学校を頑張るモチベーションになったので、部活を楽しんでほしいです」と話してくれた。



「些細な時間を楽しんでほしいです」

郷土芸能 愛知県日本福祉大付属高校 「3年間はあっという間でした」



最後に全員でばちを同じ方向へ向ける

日本福祉大学付属高校和太鼓部が披露したのは、江戸時代の船乗り「音吉」の人生を表現した『絆〜和太鼓組曲『海嶺』より〜』だ。大太鼓の掛け声から始まり、長胴太鼓なども加わった迫力のある演奏から一転、穏やかな波を想像させるようなやわらかい笛の音が響く。ダイナミックな体の動きでもその世界観を表現した演奏が観客を圧倒した。大砲の音を表現した法螺(ほら)が鳴り響き、最後には全員が1つの方向にばちを揃えてフィニッシュ。圧巻のパフォーマンスに、会場から大きな拍手が沸き起こった。



「3年間をかみしめて楽しんでほしいです」

終了後、部長の加藤温人さん(3年)に話を聞いた。舞台を終えた感想を聞くと「仲間と一緒に叩ける機会が増えて、また国立劇場改修工事前の最後の機会に演奏させてもらうことができ嬉しいです」と話してくれた。日本全国の様々な場所を周って演奏してきたが、中でもこの総文祭が最も印象に残っているという加藤さん。最後に「先輩がいつも『3年間はあっという間だ』と言っていて、そんなことはないだろうと思っていたのですが、自分が終わってみると本当にあっという間でした」と自身の3年間を振り返り「苦しかったりつらかったりする時があると思いますが、それを乗り越えたときには、この仲間と一緒に演奏できる楽しさややりがいを感じられると思います。3年間をかみしめて、楽しんで過ごしてほしいです」と後輩にエールを送った。

来場者インタビュー

2日目の公演を見た来場者の方々に話を伺った。東京都内から来た夫婦は娘さんが舞台演劇をしていたことから興味を持ち、この公演に来たそう。一番気に入った作品は網走南ヶ丘高校の「スパイス・カレー」で、「コロナ禍でも変わらない親子の何気ない日常の様子に親近感がわいた」と話した。スタッフに知り合いがいて来場した、都内の学校に通う中高生たちは島根県立三刀屋高校の「ローカル線に乗って」を観た。ストーリー性と演技の上手さに涙が浮かぶほど感動した、と思いを語った。

東京公演2日目プログラム		
オープニング公演	鹿児島県 鹿児島高校	靖風
日本芸能	千葉県 成田国際高等学校	箏のための「展」
日本芸能	愛知県 東海南高校	二つの群のために
郷土芸能	愛知県 日本福祉大付属高校	絆〜和太鼓組曲『海嶺』より〜
郷土芸能	沖縄県 八重山農林高校	米ぬめし
演劇	東京都 町田高校	オリビアで聴きながら
演劇	北海道 網走南ヶ丘高校	スパイス・カレー
演劇	島根県 三刀屋高校	ローカル線に乗って

郷土芸能 沖縄県八重山農林高校 「普段の授業での学びと関連づけて練習しました」



八重山地方伝統の唄と踊りを披露

郷土芸能部門で『米ぬめし』という田植えにちなんだ仕事唄を披露した沖縄県立八重山農林高等学校郷土芸能部。八重山地方でははるか昔から稲作が伝来しており、先人たちが種子の成長祈念として歌ったのが発祥とされている。

『米ぬめし』は3部構成になっており、第1部で稲の発芽を祈り、第2部では稲作や脱穀、精米を表現し、第3部では豊作の喜びを謡い踊るという内容になっている。演者は踊りを担当する踊り子と歌や楽器といった音楽要素を担当する地謡の2つの役割に分かれる。

第1部、第2部では実際の稲作の様子を体全体で劇のように表現したり、実際の稲作の様子を、小道具を使って表現するなど様々な表現の工夫がみられ、観客たちは興味を掻き立てられていた。第3部では地謡にあわせて指笛を使うことで沖縄民謡特有のポップで明るい雰囲気を出しており、会場からは自然と手拍子が沸き起こる程の盛り上がりを見せた。

公演終了後、副部長を務め、公演では地謡を担当した山田健太さん(3年)にお話を聞いた。普段は沖縄での活動がほとんどなので、東京のような有名ところで舞台に立つことができたと笑顔で話してくれた。総文祭本番や東京公演に向けては普段の授業の学びと八重山地方の芸能文化を関連付けて練習することを意識したという。特に農業高校であるため、農業に関する実技的な授業が多く、普段の授業の内容が『米ぬめし』の解釈やイメージ付けに役立つことが多かったそう。総文祭で上位になり、東京公演にまで来ることができたのは後輩たちの協力があってこそだったと思うと山田さんは話す。「後輩たちにはこの調子で自分たちの実績よりも高く、さらに優秀な成績を収めてほしいと思います」と後輩にエールを送った。



「普段の授業から学んだことも多いです」

演劇 東京都町田高校 「みんなが一番なことが作品の魅力です」

後半の最初の公演では東京都立町田高等学校演劇部が演劇「オリビアで聴きながら」を披露した。「高校生への応援歌」をテーマに一人の女子高校生と全員が田中という名字の4人のおばあさんとの交流と成長を描いた物語だ。物語は、コロナが流行し始めたときに高校生になった凜が高齢化社会での仕事についてのレポート課題のためにおばあさんたちが営む食堂「オリビア」に取材をしに行くところから始まる。おばあさんらしさにとらわれない4人のユーモアとコロナ禍でもめげない凜の姿に感化される作品だった。



4人のおばあさんと歓談する凜

特別出演校としてこの舞台に立った感想について凜役の六倉杏さん(3年)、順子役の原和奏さん(3年)、美智子役の植田望心さん(3年)は「二年生で中心となって作り上げた作品が東京都の代表の作品になったことは今まで行ったステージを見てくださった多くの方の応援があったことと思



「それぞれのおばあさんの違いを出すことに苦労しました」

ています」と支援してくださった方への感謝を語る。

この作品が出来上がるまでを「ひとまとめに4人のおばあさんといっても年齢も歩んできた人生もそれぞれ違うので、違いを出すことに苦労しました」と振り返る。そしてこの作品の最大の魅力を「凜一人が主人公ではなく、5人全員が主人公の物語であり、誰かが一番ではなく、みんなが一番であるところだと思います」と語っていた。

後輩へ向けて「演劇部としては人数が少ない方なので、これからも人数が減らずに健康に楽しく演劇をやってほしい」とメッセージを送った。

演劇 北海道網走南ヶ丘高校 「ずっと先にこの劇を見ても感動してほしいです」

北海道網走南ヶ丘高校演劇部が披露したのは「スパイス・カレー」。この作品は網走南ヶ丘高校演劇部が19年前に同じく総文祭で披露し、優秀賞を獲得した「チキン・カレー」という作品をオマージュしたもので、急逝した祖母の遺品から秘密のレシピ集ノートを見つけた主人公の絵里香は、親戚が集まる中でスパイス・カレーを作り始めるというもの。



ありふれた日常を描く

絵里香役を務めた佐々木凜子さん(2年)は実際に舞台に立った感想を「日本で一番大きい劇場で公演するというので、全国の舞台よりも緊張しました」と語る。



「とても緊張しました」

網走南ヶ丘高校演劇部は、今年1年生が入部するまで部員がたった五人しかいなかったそうで、一人でも休んだら練習ができなかったりその時出ていない役者が裏方の照明や音響を行ったりと大変なことも多かったという。この劇に込めた思いを佐々木さんは「今回の内容はとても普遍性がある作品だと思います。だから、ずっと先にこの劇を見ても感動できるようにと思って演じました」と話してくれた。

そして、今回の舞台を持って3年生は引退し、佐々木さんたち2年生が部活を引っ張っていくことになるそうで「3年生がいなくなるのはとても不安ですが、自分も3年生のようなカッコいい姿を後輩に見せられるように頑張っていきたいです」と熱く意気込みを語ってくれた。

演劇 島根県三刀屋高校 「新聞を読んだりして昭和を再現しました」



出征に向かう場面 戦争の悲惨さを伝える

島根県立三刀屋高等学校演劇部は、地元島根県雲南市の木次駅を舞台にした「ローカル線に乗って」を披露した。10時56分発の汽車に乗るために木次駅のホームへと走ってくる一人の女性。間に合ったかどうかはわからず駅員に尋ねると「1059」と答えた。二人のかみ合わないやり取りが続くとき、来るはずのない昭和の思い出を乗せた一本のローカル列車が現れた。列車内では昭和、平成、令和と異なる時代に生きていた人たちの価値観や豊かさの違い、戦争の悲惨さについて説いた涙あふれる作品となっている。クライマックスでは会場のあちこちからすすり泣きが聞こえるなど多くの皆さんに感動を与える演劇となった。

昭和の思い出を再現するために芳江役の勝部瑞穂さん(3年)は部員と一緒に昭和時代の新聞や町にある古い新聞を読んだという。また舞台を歩くとき体がふらつかないように声が会場に響き渡るように発声練習や筋トレを適度に行っていると健一役の佐藤巧一さん(3年)は語った。

今回、演者として登場した佐藤さんと勝部さんは舞台を終えて「歌舞伎など日本の伝統芸能を行っている国立劇場で高校生として演劇することができて言葉にならないくらいうれしいです」と涙ながらに答えてくれた。また後輩に向けて「一年生と二年生の部員が合わせて5名だけと少ないから仲良く、自由にのびのびと楽しんで部活してほしいです」と願った。

昭和の思い出を再現するために芳江役の勝部瑞穂さん(3年)は部員と一緒に昭和時代の新聞や町にある古い新聞を読んだという。また舞台を歩くとき体がふらつかないように声が会場に響き渡るように発声練習や筋トレを適度に行っていると健一役の佐藤巧一さん(3年)は語った。



「部活をのびのびと楽しんでほしいです」

2日間の取材を終えて
こんにちは。錦城高校新聞編集部です。都新聞部門として今回出演者の皆様に慌ただしい中取材させていただき、ありがとうございます。
私はこの舞台を通して、様々なことを学べたと感じています。具体的には、自分と同じ高校生が全国各地で様々な伝統芸能や演劇を学んでいると知れたことです。
私が特に印象に残っている舞台があります。それは島根県三刀屋高校の「ローカル線に乗って」です。この舞台では戦争の悲惨さがとてもリアルに描かれており、舞台が終



仕事に熱意をもって取り組む沖さん

この東京公演は出演している高校生だけでなく、観客を始め様々な人にとっても新たなことを学ぶことができる。そんな一面を、仲さんの取材とインタビューを通してみることができたように思った。

高校生から受け取る新たな視点
三刀屋高校密着のTVディレクター
公演も最終盤に差し掛かった2日目の午後、最終リハーサルを終えた島根県立三刀屋高等学校に密着取材しているNHKの腕章をつけた方を見つけた。その方は、NHK松江放送局でディレクターとして活動している仲紗代子さん。お忙しいところではあったが、話を伺うことができた。
今回、仲さんが全国大会に出場した三刀屋高校に密着取材を企画したそう。今回の公演には2人体制で取材を続けてきたという。仲さんは三刀屋高校の優秀賞受賞が決まった7月ごろから、同校の稽古などに密着をしているそう。この1〜2か月の間、三刀屋高校の生徒たちを見続けたそう。仲さんが持っていた三刀屋高校の「ローカル線に乗って」の台本を見せてもらって、最終回は、席を立ち始めた観客に即座に感想を聞きに向かう仲さん。今回の密着取材を振り返り、「今まで私たちは地方のローカル鉄道という話題について、その「課題」だけをフォーカスしてテレビ内で取り扱っていました。しかし、三刀屋高校の皆さんはまた違った視点で同じ「ローカル線」について向き合っていた。自分たちとはまた違った考え方で、新たな視点を手に入れることができたと思います」と笑顔で話してくれた。